

共学化問題に関する調査報告

海外の動向に関して

平成16年6月27日
宮城県仙台第二高等学校同窓会
共学化問題研究会

1、学力成長に関する別学共学比較

諸国の文献を紐解くと、別学と共学の比較優位を調査し論じたものが存在する。英国教育研究財団の報告に、別学の学力成績に対する効果を記したものがあつる。(Thomas Spielhofer, Lisa O'Donnell, Tom Benton, Sandie Schagen, Iian Schagen, The Impact of School Size and Single-sex Education on Pupil Performance, June 2002, National Foundation for Education Research, UK) それによつると、総合制別学校の女子生徒の方が共学校の女子生徒より成績達成度、特に科学(理数系科目の意)において高いという報告が記されている。また、この報告では、別学校の男子生徒は共学校の男子生徒に比べ顕著な差は見られないが、それでも科学(理数系科目の意)においては別学校の男子生徒の方が到達度が高く優位性があると報告している。

また、別学にした方が、女子生徒が数学や物理を選択する事例が増えつると指摘する報告例がある。男子の存在に影響されない環境が女子生徒の志望選択に有効に作用するつとつう指摘である。(Leonard Sax, M.D., Ph.D., Science, Computers, and Gender Equity - Is there a role for single-sex education? National Association for Single Sex Public Education, 2002 より) 一般的に言われる、この科目なら男の子と言つた、性差による科目選択の形を打ち破るものであり、こつうしたことは他の研究結果からも報告されている。

詰まり、男女とも理数系の科目の学力を伸ばしてやるためには別学が有効とつうことになる。また、上に引用した以外でも、別学の優位性を示す報告がある。特に、近年は脳科学が進歩し、脳における性差が明らかになると共に、種々の研究の結果により教育における性差成長特性の違いが指摘されている。今後の研究の進展により、性差に応じた教育環境を子供たちに提供することが科学的に正しいと言つて得る可能性があつる。

今後、科学技術分野への女性進出や当該分野における指導者の育成を考えると、こつうした別学の効能は一考に値する。特に、我が国では研究分野における女性の教授や研究室長等の指導的地位への登用機会が少なくと指摘されている。平成14年版科学技術白書でも研究分野への女子進出率が他分野より低いことが記されている。女子の持つ潜在能力を伸ばしてやる環境として何が適切なのかが調査・研究に値する。

2、世界の動向

「共学化が時代の流れ」とつう言葉をしばし耳にするが、果たしてこつうか? 以下、国

内及び国外の状況を概観する。

国内でも、有力な高等学校は別学校が国立にも公立にも私立にも存在する。国立大学にも別学校は存在する。また、トヨタ自動車・京セラ・JR東海の三社が合同で平成18年に創立する六年制一貫高校は男子校である。教育の形態として別学が維持され、また新たに選択されている。

目を海外に転ずれば、別学校は相当数存在する。

例えば、英国では上位50校の内、男子高校が18校、女子高校が28校、共学高校が4校と言う報告（"Top 50 schools in UK"より）や、上位50校の内8割以上を別学校が占めると言う報告（BBC News, Education League Table 2001）が有る。厳として別学校が存在している。

また、「税金で運営される公立高校は性差による入学規制があってはならない」との考え（門戸開放論）に基づき1970年代から共学化を進めて来た米国では、10年ほど前までは別学教育を行う高校の数は僅か3校であったものが、近年別学規制の考え方を改め、今では別学教育を行う学校が97校になっており尚かつ増加傾向にある。共学と別学の共存が国民に選択肢を与えるとして見直しが進んでいる。（2004年3月3日付けUSA TODAY "Federal officials to ease limits on same-sex public schools", 及び National Association for Single Sex Publication Education, "Single-sex public schools in the United States", <http://www.singlesexschools.org/schools.html>）

豪州も高等学校には別学が相当数存在する。そして別学校の生徒の方が共学校の生徒に対して好成绩（15~22%優位）を収めているとの報告がある。（Leonard Sax, What's the evidence? What have the researchers found when they compare single-sex education with coeducation? National Association for Single Sex Public Education, 2003）

因みに、ヒラリークリントンは別学校の出身とのことであり、別学校の利点を主張し共学校との共存を支持している。（2001年6月7日米国上院議事録）

別学校は厳と存在し、また一部には増加傾向すら見られる。こうした世界の状況を鑑みれば、共学が世の趨勢であるとは決して言えない。詰まり、巷間よく言われる「共学化は時代の流れ」とは単なる思い込みに過ぎないことが分かる。その淵源は、第二次大戦直後に米軍の占領下で我が国民に刷り込まれたものに他ならない。

3、結論

以上、国の内外を概観した。別学の優位性を指摘する研究報告すら有る。現時点では、共学を絶対善とする科学的根拠が存在しているとは言い難い。また、別学は世界中に厳として存在しており、共学化が時の趨勢であるとも言い難い。科学的根拠を有しないものを、そして事実誤認に基づくものを国民・県民に強要することは出来ないはずである。